

# 書誌学——その擁護のために

## Bibliography —— An Apologia

Walter Wilson Greg

訳 前田貞昭・山本あい

書誌学 Bibliography は「文学研究の文法」“the grammar of literary investigation”<sup>(原注1)</sup> であると言いだめた人物が誰であれ、文学研究を非常に狭く見ていたか、ことによると、書誌学を誤解していたのではなかったのかとさえ思われる。——あるいは、その両方であったのかも知れない。しかし、この言句は適切で示唆に富んでいることも確かだから、この言句を最初に思いついた人物は書誌学と文学研究を熟知し、さらには書誌学が歴史学として位置づけられることを予見していたのだと私は考えたい。この言句は、やがては、十分な意義を持つものとして、また、それなりの敬意を以て評価される日が来るだろう。文学研究を、書誌学的手段によって到達し得る範囲内に限定するのは馬鹿げている。そうであるから、書誌学が文学研究だったとか、文学研究の補助手段だったとか言うのは、書誌学を広く捉え過ぎて書誌学の意味を拡散させてしまっているか、文学研究を限定し過ぎて文学研究それ自体の価値を見失わせてしまっているのである。書誌学と文学研究との関係を実りあるものにするためには、文学研究を、その最も基礎的な位相——すなわち、本文の確定と推移——に限定して捉える必要がある。あらゆる文学批評の根底には本文変容 transmission の問題が横たわっており、その問題を扱い得るのは書誌学をおいてほかにない。これが書誌学が文学研究の文法だと言うことの意味なのである（私はそのように考える）。書誌学こそが研究の基礎的な道具である、あるいは、そこに基礎的な問題を解く鍵がある、と言ってもよい。すなわち、書誌学が文学研究の文法であるとは、書誌学が文学的資料体 literary documents の本文変容 transmission に関する科学であると言うに等しい。

この観点から直ぐにでも議論を進めたいのだが、その前に、私は、書誌学 Bibliography という言葉を甘んじて使い、また、この言葉に執着もあるのだが、この言葉に満足しているわけではないことを前置きしておきたい。書誌学 Bibliography という用語の語形やそれが類推させるのは記述科学であるが、私自身はそれには当たらないと思う。Bibliology という古い用語は何の色合いも着いていないという利点を持っていたが、この言葉そのものが魅力的ではなく、今更あらためて復活させるほどのものでもない。Booklore というのは魅力的な言葉だが骨董趣味の匂いが残っているし、bóklár (book-learning) という言葉を連想させそうであって、実は私が誠に適切な表現だと思って懂れているドイツ語の Bücherkunde という言葉ほどには私を惹きつけない。Bibliography という言葉は Bibliography でよいのだが、この用語を使うにしても、分類〔書誌学〕や記述〔書誌学〕を特別に重要視する<sup>(原注2)</sup> ものではなく、第一義的なものとするものでもないことは明確にしておきたい。分類〔書誌学〕や記述〔書誌学〕を格別に重視し、第一義的なものとする思い込みが、過去において書誌学を無意味で下らないものにしたたり、書誌学の紛うことのない本質や、書誌学において真に重要なものを認識することを大きく妨げて来たのである。書誌学とは書物の内容に関わるのではなく、書物の形態に関わるものであることはここに記しておいてよいが、この問題について、これ以上論議する必要はないだろう。

さて、書誌学とはモノとしての書物を研究するものだとして、書誌学がまともな研究領域であるためには、書物そのものに重要な価値があることが前提になる。それでは、書物の価値とは何だろうか。ミルトン Milton [1608年～1674年] は、書物とは「育ててくれた命ある知性の最も純粋な効験ある精髓を、葉ビンに保存しているものであります」<sup>(原註3)</sup> と言っている。書物とは、私たちの眼前にあるこの世界を作り上げてきた人々の過去と私たちとを繋ぐ主たる絆であり、過去の人々の行為や欲望の記録であるばかりではなく、思想や希望の宝庫でもある。歴史の研究や文学の楽しみが人間にながしかの価値を持つのであるならば、書物はまさしく貴重な遺産である。書物の価値は、過去をどれほど保存しているかということにかかっている。しかし、ミルトンの言葉には実際の体験によって得られたものよりも、書物の方が信頼し得るといふ含みがあるように思われる。数多くの観点からなされる本文の探索や校訂という辛抱強い本文研究によって、記録は書き換えられる。私たちが書物に記録されたものを読むこと、そして、書物はその機能を十全に果たすことに役立つ場合にのみ、モノとしての書物研究が重要な意味を持っている。すなわち、書誌学の本質は、文学的資料体の本文変容 **transmission** に関わる科学だということにある。そして、このことだけが、真摯な研究者を惹きつける魅力を持っているのである。

こういうわけで、伝統的書誌学が書物の基本的な機能を看過し、本質的でない偶発的な要素に関心を寄せがちだった点に、私は異論を差し挟むことになる。本稿において、私は書誌学に関する私の信条の根底から発する主題を明確にしたつもりである。また、書誌学の形式的な定義を意図したというよりも、むしろ、本文研究における書誌学の機能を明らかにしたつもりでもある。何かを排斥するつもりは全くないが、書誌学が批判的諸科学 **critical sciences** の一つとして認識されるべきことを主張したい。最も端的な表現で私の主張を繰り返せば、書物とは作品本文の変遷を反映する物理的手段＝モノであり、それゆえに、書誌学（書物の研究）の本質は、文学的資料体の本文変容 **transmission** に関する科学である、ということにある。

このように立脚点を定めると、書誌学に含まれるのが常識とされる多くの項目を排除しているか、少なくとも軽視しているように見えるだろうか。活版印刷技術の研究ほど、多大な労力が費やされ、輝かしい成果を生んだ分野はない。活字字面が国や都市あるいは印刷所によって異なっていたことを、その研究が明らかにしたのである。このような歴史研究が、人類の才知が花開かせて来た偉大な技術の発明・発展やその貢献と見做されるものが迎って来た、歴史それ自体に対する興味に由来していることは疑いない。とは言いながら、その種の調査の真の目的が何であり、書物の製作とどのような関係があるのかを問えば、不明だった製作年月・地域が特定できることだという答えが返って来るだろう。この調査によって書物が製作された日付・地域にとどまらず印刷所までも特定できるのであって、書物の製作された日付や地域・印刷所は、常に本文変容 **transmission** と密接な関係を有し、場合によっては本文変容 **transmission** の考察に資する、決定的な事実を提供する。活字研究のこうした貢献が活字研究を書誌学の重要な一部門であることを正当化するし、私たちもそれを認めざるを得ない。書誌学における活字研究の存在意義も、そこに生じることになるのだ。事情は書誌学の他の部門でも同様だ。一方では、本文再建問題のみに限定するのではなく、偶然に左右される本文推移 **text-transmission** 過程に生じるあらゆる可能性も見落とさず、囚われることのない幅広い心構えで本文変容 **transmission** の研究に当たらなければならない。他方、書誌学がモノとしての書物の研究である以上、モノとしての書物に関わる全てを抜き取りなく認識するのも責務である。書誌学という用語には可能な限り広い拡がりを与えて、どんな研究領域であれ、そして、その研究領域の主要な関心事が何であれ、文学的資料体を保存し伝える書物の機能に関与していれば書誌学的な意義があるという原則を甘んじて受け容

れて、書誌学の部門には、書物の本質的な要素には関わらなくても芸術や工芸もしくは伝記など、それらの関心事から多くのことを引き出せる研究領域も含まれることを期したい。

書誌学者が普通に対象としている様々な問題について、それが書物の基本的機能と関係しているものなのか、あるいは関係しているとすればどのように関係しているのかを問い、さらに、そのどのような点が書誌学上の意義を持っているのかを厳密に問えば、私の提起している問題が鮮明になろうし、また、書誌学の範疇から書誌学に相応しい部門を排除しようとしているのではないことも明らかになろう。ついでに言えば、古文書書体学 *Palaeography* が基本的には活字研究と同じ位置にあって、本文推移 *text-transmission* との関係はさらに明瞭だ。書誌学の部門はほかにもあるが、古文書書体学 *Palaeography* ほどはっきりと本文推移 *text-transmission* に関わるものはない。

第一に指折るべきは、挿画である。挿画というのは、そもそも視覚芸術 *graphic art* の領域に属すると考えられ、書誌学の領域に深い関わりがないように解される傾向にあるのは疑いない。挿画という芸術作品が書誌学者の注目を惹くのは、それが単に書物に描かれているからに過ぎない、と言うかも知れない。時としてそれ以上の深い関係があるのだが、挿画と書物との関係が生じていたとしても、それは表層的であり、必然性を欠いたものの一つだと思われがちだ。もちろん、書物とりわけ専門書においては、挿画を不可欠な構成要素とすることがあるが、そうした例は比較的稀であって、挿画は殆ど注目されることはなかった。私の疑問はこんなことだ。——挿画が描かれ、場合によっては多少とも書物の重要な部分を構成していれば、書誌学者は注目しなければならない。挿画の重要性が芸術的形姿にあることは認めよう。その前提で、挿画の重要性が芸術的形姿にとどまるがゆえに挿画に関しては書誌学の枠外にあるとしなければならないのか、そうではなく、書誌学というものを厳密に考えても、やはり、挿画は書誌学において重要であると言えるのだろうか？ 私は後者であることは疑いないと思う。挿画の在り方によって、その挿画が書誌学に占める重要度も異なるというのが実際である。挿画は、印刷された書物よりも筆写された書物において重要度が高く、筆写された書物においては初期のものの方が重要度が高い。本文とは別に印刷されて、既に本文が出来上がった後で挿入された版画（銅版画）のような場合は、最低限の関連しかないだろう。しかし、少なくとも本文と同時に印刷されるという点では一連の作業の中にある（板目）木版、また、手彩色家や細密画家の仕事に関しては状況は異なる。本文の出来上がった後に、本文とは別に挿画が描かれるのが通例だが、そうした場合でさえも、挿画は解説として機能することがあるし、装飾された文字に負けず劣らず本文を装飾するものであるのだ。こうした一面以外にも、本文系譜においては、本文と挿画を一体に扱った方が便利なほど、両者には密接な関係が頻繁に見られる。さらに筆写物に限らず時には印刷物においても、製作場所や製作環境また読者対象に関して、挿画は重要な手掛かりになる。いずれも、本文推移 *transmission of the text* の歴史においては重要な点である。だから、書物の挿画に関する研究を視覚芸術の分野に全面的に委ねることは、書誌学にとっては大きな損失なのである。書誌学者が、書物の手彩色や（板目）木版や版画（銅版画）の研究に没頭することは、専ら芸術史の研究に貢献しているように見えて、実は、同時に書物の基本的なことから——厳密な書誌学の領域においても正統的なことから——についての研究にも貢献しているのである。

次に指折るべきは製本である。挿画とは異なって、製本は純粹に書物に関わる技術である。そして、その本質は書物の形に関わる。製本は、実用と装飾の二つの面を持っている。実用の面では、製本技術を扱うことになるのだが、製本技術・製本材料やその使用法に関する、格別に体系的な知識は用意されていない。とはいえ、その重要性は明瞭である。この書物を保存しておくための技術について注意を払わない書物研究者はいない。私たちの関心からすれば、製本は、本文変容 *transmission* に関与

する要因として数え上げられるものではなく、本文変容 *transmission* を考究する際の前提である。尤も、正直に言えば「単なる骨董趣味」に過ぎないという疑念を拭き切れるものなのか、少々戸惑いがなくもない。私の杞憂に過ぎないかも知れないが、こういう疑念が存在することは一つの警鐘として受け取っておくべきだろう。私は私たちの研究が普遍的であるべく努めてきた。書物の製作に関わる全ての領域の事実が目が行き届くまでは、それらの領域が本文推移 *text transmission* の中心的な問題をどのように担っているのかということについて明言できない。その限りでは、書誌学において製本の実用的な面が重要であるという主張に多くは期待出来ないように見えることは認めるが、——製本の在りようが当該書物の製作地域を明らかにするというようなことは取り敢えず措いて——、書物に関わる問題としても、製本もしないで手書き原稿を長期保存したり、輸送のために製本した書物を解体してしまったりする慣習があるか否かを思い起こして欲しい。

書物の製作や保存の歴史という点では、装飾的製本はさして重要ではない。また、装飾的製本が実際に多大な関心と呼ぶのは、書誌学的な重要性に拠るよりも、芸術的魅力に拠るという事実がそれを証明している。写本の彩飾が純粋な芸術の領域に属するのと同じく、装飾的製本も純粋に工芸の領域に属する。革細工一般のことを離れて型押器による製本を論じること、あるいは、木彫のことを無視してパネル・スタンプ<sup>(訳注1)</sup>を論じること、金細工職人を無視して宝飾製本を云々すること、あるいは、私には嫌悪感を抱かせる刺繍による製本にしても真っ当な針仕事を抜きにして考察することは不可能である。これらの全ての研究が、時として、書誌学的に非常に重要な意味を持つことさえある。私が今ここで述べなければならぬ書誌学上の重要性という点に関して言えば、製本の在りようが、時には、書物の製作された地域に関する有用な示唆を与えたとといったように、書物の由来を知る上で有効な徴証を得ることもあるのだ。

装飾的製本は、コレクターの注文を受けて、その嗜好に合うように製作されたものだから、特定の個人と深く関わっている場合が多い。おのずと当該書の所有者のことが気になるにしても、所有者に関わる研究は、普通、書誌学的関心とは無縁なコレクターの趣味を問題にする。しかし、特に初期の写本の所有者に注目している場合は、そうだとは限らない。中世以来の、名のある修道院の図書館に残っている古い蔵書目録や現存する写本を利用して、本文再建のために多大な労力が払われて来た。本文研究者には、時に、そのようにして可能になった本文の再建は大きな価値を持つことがある。或る写本が、或る特定の日に、或る特定の図書館で披見できたことが分かれば、その事実は、原本の所在する場所や原本の置かれた状況を探究する糸口として大きな価値を持つ場合がある。後年の影響関係ということだけを取り上げても、その写本が、他のよく知られた写本によって不純な混淆を生じる可能性があったか否かが分かることや、逆に、他の写本に影響を与え得た否かを調査できることが重要なこともあるのだ。それほど多くの例があるわけではないが、比較的近年の印刷本の所有者に注目する文学研究者がいる。例えば、早い時期の編集者が或る本文の読みについて記述している場合、単に原本を読み誤っているだけであるのか、あるいはそうではなく、その編集者が、現在では、既に失なわれしまっているか、あるいは、所在不明となってしまった本文を手にして、そのような記述をしていたのかという判断を下す前に、果たしてその編集者がどのような本文に接することが可能だったかを知る必要がある。しかし、本文変容 *transmission* の考察範囲を本文編集の歴史にまで拡張するのは（そうした本文は副次的本文 *association copies* と呼んでよいだろう）、場合によっては、単なる無駄でしかない。オロシウス *Orosius* [スペインの神学者・歴史家。生没年不詳、5世紀初頭に活動] のアングロサクソン *Anglo-Saxon* 版が初めて編集されたのは、1773年のことで、編集したのはデインズ・バリトン *Daines Barrington* [英国の弁護士・博物学者、1727年～1800年] であった。しかし、バ

リトン Barrington は、その序文にジョセフ・エームズ Joseph Ames [英国の書誌編集者・印刷史研究者、1689年～1759年] の書簡を引用して、その材料はエームズ Ames に負ったところがあると説明している。バリトン Barrington が引用したエームズ Ames の書簡に明らかなように、エームズ Ames は一度はその編集を目論んだことがあるのだ。私の所持する本にも、エームズ Ames の書簡のオリジナルが挿入されている。私は書誌学者としての自負を刺激されて、純粋に書誌学的な興味をついつい覚えてしまうのであるのだが……。

製本というものは、書物を保存・保護する上で最も大切な要素ではあるにしても、本文自体を左右するようなものではなく、変容する本文を保持する上で必要なものであるに過ぎないということを、ここまで述べてきたつもりである。そういう意味で、製本に書誌学的な位置を付与することを躊躇ってきたのである。昆虫学や化学といったような類の、書誌学との関係が曖昧な領域に誘い込まれないように、私達はどこかで厳密な線引きを行なう必要がある。実用的なことにしろ、骨董趣味的なことにしろ、また、広範な領域に亘る司書の仕事においても事情は同じだ。書物に関わっている場合は大丈夫だが、しかし、そこから派生した領域の問題を追究していて、たちまちの内に、書誌学的議論から離れて、ふと気づくと建築学的な議論などに踏み込んでしまっていることがある。図書館建築が本文推移 textual transmission の問題に関わった適例が今すぐには思い浮かばないにしても、そのような事例が存在し得るし、僧院建築と写本室とが密接な関係にあることは疑いないと私は信じている。

私がこのような長々しい脱線をしてきたのは、書誌学が、文学資料体における本文変容 the transmission of literary documents と呼ぶべき、書物の根幹的要素に関わる限りにおいて、そして、その限りにおいてのみ、書誌学は純粋な研究たり得ると確信しているからである。私はこれまでと同じように偏りなく考察を進め行きたいし、厳密な意味で書誌学上で重要な知見は、必ずしも書物愛好家が没頭しているものとは限らないという前提は必要だが、書物に関わるあらゆる部門の知見を組み入れることによって、書物に関わる問題が解明されることを期待している。A bibliotheca sum, nihil biblicum a me alieum put. (「私は書誌学者である。書物に関わることで私に無関係なことはない。」この警句はテレンティウス Terence [紀元前2世紀頃のローマの喜劇作者] の Home sum; humani nil ame alienum puto. 「私は人間である。人間に関わることで私に無関係なことはない」<sup>(訳注2)</sup> という「自虐者」*Heauton Timoremenos* の77行目を踏まえたもの)。

私は、文学資料体上の本文変容 the transmission of literary documents を研究する書誌学については、大胆なことを述べて来たが、まだ、書誌学と本文推移 textual transmission との関係に関わる疑問については全く答えようとはして来なかった。これについては正面切って答える必要があろうかと考えている。例えば、次のように言う人があるとしよう。——あなたの定義は単なる虚仮威しである。書物は物質的存在であり、書誌学はその外形的・形態体的な面に関わるものであって、書物の内容に何ら関わるものではないとあなたは主張しているが、そうすると、あなたの言う書誌学は本文推移 textual transmission の問題にどのように関わるのだろうか。あなたは、本文研究は基本的に書物の内容に関わる研究であり、書物の形態的な面には関わらないと言っているのである。——粗探しをしたいというような底意などが全くなくて、このような問いが発せられたとすれば、これは問題の核心に触れるものだろう。これまで述べてきた考え方に些かの変更も加えずに、このような問いに答えることが出来れば、文学批評の基礎となるような原則を樹立することが可能になり、文学研究に対して実質的に顕著な影響を及ぼす認識を直ちに得られるだろうと私は信じている。

書誌学者は、紙・羊皮紙に筆写・印刷された記号 sings を扱うものであることを、議論の出発に置くことにしよう。筆写もしくは印刷された記号 sings は、単なる恣意的な形 mark として扱う。それ

らの意味は書誌学者の関わる場所ではない。写字生によって筆写されるのであれ、印刷者によって植字・印刷されるのであれ、本文が再生産されるというのは疑いようのない書誌学上の事実であり、書誌学者は写本と印刷本とが弁別できなければならない。作業中の写字生を観察してみよう。印刷所で踏む手順も基本は同じだから、問題を簡明にするために、取り敢えずは印刷所のことは措いておく。写字生は、一定の方式で目の前の原本に書かれた記号 *sings* を写して行く。正確に写し取らないこともある。——例えば、原本のアンシャル体 *uncial* を小文字の筆記体書き換えているかも知れない。しかし、原本の記号 *sings* と写し取られた *sings* との間には、或る一定の対応関係があるはずだ。時々その対応関係が崩れることがある。そうした場合に本文異同 *variants* と呼んでいるものが生じる。それは、写字生の不注意によって生じたかも知れないし、あるいは、写字生が十分に自覚した上で操作を加えた結果かも知れない。いずれにしろ、そこに残っているもの、そして、本文研究者に証拠として利用されるもの、それらは全て、対応関係の不一致 *failure* という書誌学上の事実である。本文研究とはこれらの錯誤 *failure* の研究である。本文の記号 *sings* の意味や本文の内容を一切排除して、錯誤 *failure* という言葉は、このような内容を持つ書誌学用語として定義できるのである。

以上のように見てくると、理論上、本文推移 *textual transmission* の研究においては、資料の意味を知る必要はなく、その形態上の知見だけで十分である。資料が意味を成さなくても、また、資料に記されている言語を本文研究者が知らなくても、理論的には事足りる。アラビア文字風に手書きされた中世の資料が残っている。アラビア文字風と言ったが、そこに書かれている文字 *sings* はアラビア文字を多少なりとも真似てはいるのだが、恣意的な書きぶりで、単語の形さえ読み取れない。ヴォイニッチ手稿 *Voynich Manuscript* の名でよく知られたこの文書は、ロジャー・ベーコン *Roger Bacon* [1214年～1294年] によって記された秘密の記録だと推測されてきたが、私が間違っていなければ、暗号などではなくて、単なる古文書に紛えた悪戯である（フランスの批評家が *une diablerie* [悪戯書き] と呼んでいたが）。さて、そのような悪戯紛いの手稿の筆写であっても、真面目に書かれたものと同じように、本文研究の原則は適用可能だ。現代の例を出してみよう。バートランド・ラッセル *Bertrand Russell* [1872年～1970年] とアルフレッド・ノース・ホワイトヘッド *Alfred North Whitehead* [1861年～1947年] との共著である『数学原理』*Principia Mathematica* [全3巻、1910年～1913年] である——殆どが記号 *symbols* で記された、明確な思念を完璧に表現した著作である。この著作は、声に出して読めるようには出来ていないけれども、著者たちの声を持たない言語によって綴られている。この書物の（第1巻の）初版と再版との間では、相違する箇所が複数ある。私も以前から知っていた僅かなことは十分に理解できるが、この書物の大半については私の知性が及ばない。しかし、それが本文異同を観察する際の障害にはならないし、さらに言えば、本文研究を妨げることさえもない。第3版が出版されたとして、第2版で生じた異文が仮に第3版にも継承されていけば、そこは初版の間違いが訂正された箇所だと私は考える。他方、仮に第3版で初めて初版の本文が訂正されたのであれば、第2版の該当箇所は誤植であったと判断する。もちろん、この推論は必ずしも正しくないかも知れない。しかし、書誌学的裏付けや書物製作の状況に基づいた妥当な推論であり、本文研究においてなされる他の推論と同じ程度の蓋然性を持っている。本文推移 *textual-transmission* の問題は、書誌学においては、事実の次元で捉える〔理論や推測に基盤を置くのではなく、あくまでも「事実」を問題にするところに書誌学の本質がある〕という主張、そして、本文異同の研究は厳密な意味での書誌学的研究であって、理論上、本文の意味とは全く独立しているとする主張は正しいと私は考えている。

もちろん、実際においては、上述したような簡明で理想的な理論では事が済むわけでない。意味を

成さない本文を編集しようと思う人はいないだろうし、また、自分の理解できない言語で書かれた本文を編集するような人もあるまい（それはそれで興味深い体験になるとは思いますが）。研究対象としている本文の意味には、思わず知らずの内に注意を払うものだ。厳密な書誌学的手続きに拠れば大変な労力を要することでも、本文の意味から辿ると迂路を経ずに結論に至ることもよくある。時によっては、本文の意味が分かることで、書誌学的方法を採っては到達不可能な結論を導き出せることもある。しかし、或る一つの方法・手続きに拠って導き出されたことと、それ以外の方法・手続きに拠って導き出されたこととを、明確に区別しておくことを忘れてはならない。もし、本当に信頼できる成果を得たいのであれば、いかなる方法・手続きを採って得られた結論であろうと、それが本文上の問題に関わる場合は、厳密な書誌学的方法・手続きを採っても、その証明が可能であるように常に心しておかなければならない。私が甚だしく間違っていたのは、本文研究上において、多くの重大な誤謬は、本文の意味と見做したものに信頼を置いたことによって生じるよりも、それ以外の錯誤の要因が組み合わさって生じると理解していたことだ。

このようなわけで、書誌学は、本文研究者を到達するべき目標に導く一つの方法なのである。書誌学は編集者に必要とされるものを全て含んでいる、と言えば大袈裟に思われるかも知れない。或る作品を編集する際に、自分の仕事に本文研究を利用するのはなるべく一定の範囲内に収めておこうとする編集者であっても、編集者である以上は、少なくとも著者の使用する言語を知っていることが求められるだろうし、おそらく、同じように、著者の生きた時代やその境遇、また、作品のテーマについても、それなりの知識が必要とされるだろう。このことは、言語や歴史、さらには、古書収集趣味あるいは技術的な知識を全て併せても、それらは書誌学と一切関係がないことを意味している。しかし、これらの必要とされることからは多様であって、対象とする作品や著者が異なればまた異なってくる。これに対して、変わらないもの——書物編集の仕事で変わらないものと言ってよい——とは、ここで明らかにしてきた書誌学の基本となるべき、本文推移 *textual transmission* に関わる原則である。書誌学の限界は極めて明瞭だ。書誌学が本文研究と同一の拡がりを持つとするのは時期尚早かも知れないにしても、書誌学と本文研究の密接な関係は明らかにされなければならない。引き続いて述べるつもりだが、本文研究についてさらに深く考察すれば、書誌学的徴証の限界と密接に対応している、本文研究が内包している方法上の明白な分裂も浮かび出てくるだろう。

さて、まず、書誌学の立場から見えてくる、本文推移 *textual transmission* の様相を検証することから始めよう。写字生は、筆写用紙を整え、手にはペンとインクを持つ。写字生は筆写することになっている原本を用意し、写字生が目にして、あるいは写字生自身が目にして判断した原本の文字を転写することによって、転写本作成の作業を進める。順調に進んでいる間は、原本通りに転写作業は進む。しかし、遅かれ早かれ、読み誤りが生じたり、書き誤りが生じたりして、原本との正確な対応関係が維持できなくなる。写字生が、原本の誤記・誤謬を発見したと思いついてしまう箇所もある。全く機械的に作業する写字生だったり、あるいは、生真面目な写字生だったりすると、目の前にあるものを正確に写し取ることに専念する。しかし、ありがちなのは、写字生が編集者を気取る誘惑に抗しがたく、そこにあるべきだと信じた文字を書いてしまうことである。このようにして、未来の研究者にトラブルの種が蒔かれることになる。こういう事情で、本文研究者は原本に何の手も加えない単純な馬鹿を神のように讃えるのである。書誌学に言う転写作業にあつては、異文を生じさせることは避けがたい。そして、さらに転写を重ねれば、さらに異文が生じる。後続する本文は、直接もしくは間接に原本から転写されたものである。原本以外には何のものにも拠らずに転写したのもあれば、原本から転写したものをさらに転写したのものもある。かくして本文の系譜は拡散し、異文は増殖

し、複雑化する。そして、後年の写本群は、原本そのものから転写されたのか、本文系譜の異なった写本から転写されたのかが分からないほどに似通い、輻輳してくる。しかし、一つの作品に関しては、写本がどれほど多数に上っても、また、本文系譜が多様になっていても、それらは全て（ただし、口承における変化は除く）、必ず、唯一の原本に由来しているのであり、そして、それぞれの本文の変化は、有限個の転写段階を経て今に至っているのである。さらに言えば、一つ一つの異文は、一つ一つのそれぞれの転写行為において、原本の一つの単語とそれに対応する転写された本文の一つの単語という、一組の単語同士の間で生じているのだ。写本が数多く存在すると、一箇所につき、数種類かそれを上回る程度の異文が存在する。本文研究者は、数種類かそれ以上の異文を対象として、それらの異文群を統括できる基本的な関係を見出そうとする。しかし、どれほど異文の間が複雑に見えようとも、事実次元において捉えれば、〔原本にある一つの単語と、それに対応するべき写本の一つの単語という〕二つの単語間に生じた相違が集積したものに過ぎない。だから、本文研究の或る部分は、多種多様な異文群を分析し、単純な構成要素に還元することで成り立っている。転写が複数回繰り返されて一つの原本から始まる系譜が形成されること、そして、単純な異文が重ねられて逸脱して行くこと——すなわち継承と逸脱、この二つが、本文変容 *transmission* における原則である。陳腐な繰り返しにしか過ぎないような言い方ではあるが、書誌学上ではこのように言う。しかし、これまでの経験から言うと、これらの意味するところが必ずしも常に認識されているわけではない。

では、次に、本文研究者の観点から本文推移 *text-transmission* の問題を検証してみよう。本文研究者は数多くの写本を点検・校合して異文を集めることから手を着けて、最終的には、著者が書いた通りに作品を再建することを目的とする。現在では広く知られているように、このことは、現存する本文が伝来するに際して経てきた道筋やその時々々の段階を再建することを意味する。この再建の際に根拠とされるのは、専ら、写本群に見られる本文の異同である。本文研究者はこれらを照合・分析して、原本から経てきた本文のそれぞれの段階に対応するように写本を分類する。本文研究者の課題は、曖昧なところを残さずに、著者の自筆原稿そのものに到達することである。最も幸運に恵まれれば、少なくとも本文研究者自身が満足し得る限りにおいては、この目的を達成したと言えることがあるかも知れない。だいたいのところは、本文研究者が到達できるのは、仮にそうしたものが存在したとしても、自筆原稿からはおそらくは何世紀も後のもので、数段階の転写を経ていて、多かれ少なかれ曖昧さを残している、いずれかの段階の原型 *archetype*<sup>(訳注3)</sup> である。写本や原型 *archetype* が一つしか残っていないければ、本文研究者はお手上げである。原本 *original text* を再構築に向かうことを助けるような文字の転置、また、丁附やライン揃えの誤りを捜し当てることがないでもない。しかし、一般に、本文研究は、非常に多数の在来の方法に依存している。

だから、本文研究者の調査がこのようなところに至っても、本文研究者が成し遂げたものには、いつも二つの点で不完全なところを残す。まず第一に、在来の方法が曖昧でないことはめったにない。原型 *archetype* の再建を目指そうにも、本文研究者は、普通、同じ程度の原著性 *authority* を持つか、あるいは、同等の可能性を持った余りにも数多くの異文を目にするのだ。本文研究者はいずれを選択するかという問題に直面する。第二に、幾つかの箇所では意味を成さないような読み方しかできない箇所や、また、著者が書いたとはとても思われぬような箇所が、原本から転写を何度か重ねた原型 *archetype* に含まれていると、これまでの方法では、その原型 *archetype* をさらに遡る道は殆ど閉ざされているのである。本文研究者は、編集者による本文修訂 *emendation* という問題に直面する。どちらの場合でも、そこには個人が責任を負うべき判断しか残されていない。熟練と熟慮に基づいた判断であることを期待したいが、著者が書いたに違いないこと、別言すれば著者が書いたに違いないと私



たちが考えることを根拠として、一つの判断が下されるのである。すなわち、私たちの判断というのは、私たちが著者が書いたに違いないと想定していることを、事実の上でも著者が書いたとするような自惚れた信条を含んでいるというのが、むしろ当たっている。

このように言うと、衝撃的であるのは疑いない。しかし、私の言わんとすることは、極端な例を挙げれば明瞭になるだろう。私たちが著者自身に手になる原本を所持しているか、あるいはそれを参看できると仮定してみよう。編集者は原本の読みからどれほど離れたところにいるだろうか？ 伝統的方法を信用してよいのならば、聖ヒエロニムス Saint Jerome [340年頃～420年] が翻訳した聖書は、かつて一度は翻訳の不完全性を問われ、その形跡が自筆原稿に残っていることになっている。聖ヒエロニムスの訳業の感化を受けてカトリックの信仰を得るようなことがあれば、そうした不完全な訳業から深い精神的感銘を得たと考えることすら、躊躇われてしまう。そうすると、靈感の誤謬だとか、人智の不完全性とかいった都合のよい言い訳を考えることになる。これは、著者が書くはずはないと私たちが考えていることを著者が書いてしまっていた時に、必ず、私たちが直面する問題の不謹慎な例に過ぎない。編集者は、著者の恥を後世の非難にさらしておくべきなのであろうか、それとも本文を訂正すべきであらうか。もし二者択一を迫られて、前者を選べば、おそらく、編集者の責務を放棄し、著者や読者たちを侮辱したと非難されるだろう。他方、そうではなく、後者を選べば厄介な責任を問われるだろう。というのも、本文研究者がその文学的感性を抛り所に検閲官を気取って、聖ヒエロニムスの不完全なところの修正に手を染めれば、シェイクスピア Shakespeare [1564年～1616年] を書き換えたポープ Pope [1688年～1744年]、ミルトン Milton [1608年～1674年] を書き換えたベントリー Bentley [1662年～1742年]、聖ヨハネ Saint John [聖書ヨハネ伝] を書き換えたゲーテ Goethe [1749年～1832年] の戯曲の中のファウスト Faustus<sup>(原註4)</sup> のように、対象としている著者の書き換えに終止符を打てそうもないからだ。本文研究者の多くは幸いにも自分自身の判断に無闇な信を置いてはいないので、上述した例のような無節操なことはしない。しかし、本文研究者が必要に迫られて本文を選択したり、修訂 emendation を施したりした結果と同じ程度には、本文研究者の判断は十人十色で様々に分かれるのだ。

ここで私が注目しているのは、言うまでもなく、本文研究には二つの完全に異なった段階・局面もしくは過程が含まれている点である。両者の相違が余りにも大きいので、共通の名称の下に括ると事を誤る。著者が書いたはずだとか、書くべきだったとかの判断を下すことは、慎ましやかな本文異同の校合や転写過程の再現といった類いのものとは全く異なった種類のものだ。一方はまず機械的な判断だと言ってよいし、他方は直観的な判断だと言ってよいだろう。私たちが辛抱強く転写の跡を追って行く作業において依存するのは、物理的証拠である。それを、従来の方法に準じる立場で利用するか、あるいは、伝統的方法を退けて本文修訂 emendation を容認する立場で利用するか——そこで得られた物理的証拠をどのように扱うかは、それぞれの心理上の問題だ。一方を研究的 critical であるかのように述べ、他方をメタ・研究的 metacritical と区別するように言うのは筋が通らないだろうか。

もちろん、この区別は一般的に認められてきたし、本文研究者はそれぞれの個人的嗜好に従って、一方を重視し、その価値を揚言してきた。凡庸かつ学術的で想像力に欠けた連中は、忍耐強い機械的方法によって書物編集の科学が必要とするところに到達できると夢見ている。しかも、かれらが無責任な素人のとりとめのない非科学的なものだと否定してきた筈のところまで、確実に到達するというのである。これと対照的なのが、想像力があって直観にも恵まれた創造的な連中だ。かれらは、自分たちの関心ある分野に重きを置く傾向があつて、本文異同や本文変容 transmission の細部そのものに目を向けようとする慎ましい機能を見下しがちである。だから、ハウスマン教授 (Alfred Edward

Housman) [1859年～1936年] が本文研究について述べた時、かれがもっぱら本文修訂 emendation のことを想定していたのは明らかだ。本文変容 transmission に関わる研究をかれがどのように呼んでいたかは分からないが、低位に置いていたことは確かである。かれと私とは状況の分析においてよく一致していると思う。私が本文研究を分類する際に、かれが私の好きなように呼ぶことを許してくれるなら、かれが本文研究 textual criticism と呼んでいるものと、私がメタ・研究的 metacritical と言っているものが対応する。もしハウスマンと私との間で違いがあるとすれば、二つの領域の価値関係にあるだろう。ハウスマンは、メタ・研究的 metacritical なことは、教養人や学者にだけ価値があると考えている。メタ・研究的 metacritical な追究が魅力的であるが、私自身は、現に確かな成果を得られると信じる、本文研究者たちの慎ましい機能を強調したいという思いの方が強い。メタ・研究的 metacritical な素晴らしい構造物は、その方法が強固な基礎を固めるまでは、砂上の楼閣に過ぎないのである。

この議論がどこに落ち着くかは明らかだ。本文変容 transmission に関わる課題について、まず書誌学の観点、続いて本文研究 textual criticism の観点から検証してきた。そして、本文研究 textual criticism の観点から検証した際に、本文変容 transmission に関わる問題が、本来的に全く異なる二つの領域に跨がっていることを明らかにした。この二つの領域の内、まず最初にあって、論理的にも優れている領域が、書誌学の本質的な在り方と深く関わっている。書誌学——書誌学という名称よりも批判的書誌学 critical bibliography という名称を好むなら、その名称を使ってもよいが、真摯な科学として位置づけたいという主張を正当化できるのは、唯一、書誌学もしくは批判的書誌学が課題とするものの根幹的要素だけである——が事実上は本文研究 textual criticism に等しいと言って来た理由が、今、理解されるだろう。

原注 1、先にこの言句を「書誌学は文学の文法である」“Bibliography is the Grammar of Literature” と不十分な形で引用したことがある。私はそれで間違っていないと思っていたし、意味するところは同じである。しかし、その時は、コピンガー博士 Dr. (Walter Arthur) Copinger [1847年～1910年] が1892年に *Transactions* 誌第 1 巻34号所載論文に掲載されていたかたちで、正確に引用していなかった。

原注 2、こういう理解は、研究の前提として列挙・分類が必要であることを示唆するものである。実際にはそういうことはない。万一、仮にそうであったとしても、そもそも全ての自然科学は何かを列挙・分類することから始まっている。

原注 3、『言論・出版の自由』*Areopagitica* (1644年 4 頁)。「原田純訳『言論・出版の自由——アレオパジティカ 他一篇』(岩波文庫、2008年 2 月15日、12頁～13頁)の訳を借用した。」

原注 4、「原注には一部省略があるが、以下には、森鷗外『ファウスト』第 1 部 (富山房、1912年 1 月15日、121 頁～122頁) から省略部分も含めて引く]

かう書いてある。「初にロゴスありき。語ありき。」  
もうこゝで己はつへえる。誰の助を借りて先へ進もう。  
己には語をそれ程高く値踏することが出来ぬ。  
なんとか別に訳せんではないまい。  
霊の正しい示を受けてゐるなら、それが出来よう。  
かう書いてある。「初に意ありき。」  
軽卒に筆を下さぬやうに、  
初句に心を用ゐんではなるまい。  
あらゆる物を造り成すものが意であらうか。  
一体かう書いてある筈ではないか。「初に力ありき。」  
併しかう紙に書いてあるうちに、  
どうもこれでは安心出来ないと云ふ感じが起る。  
はあ。霊の助だ。不意に思い附いて、  
安んじてかう書く。「初に業ありき。」

訳注1、ジョン・カーター著、横山千晶訳『西洋書誌学入門』（図書出版社、1994年5月31日、275頁）は、パネル押し型 panel stamps を「図柄を刻んだり、彫り込んだりした大型の金属製の版木」とする。

訳注2、「自虐者」第1幕第1場のクレメスの台詞。城江良和「作品解説『自虐者』」（『ローマ喜劇集』5〈西洋古典叢書第Ⅱ期〉京都大学学術出版会、2002年8月25日、693頁）は、「当時から人々の口にのぼったらしく、キケロ（『義務論』第1巻9-30、『善悪の究極について』第3巻19-16、『法律論』第1巻12-33）やセネカ（『道徳書簡』95-53）も引用し、後代には人間に関わる事象への幅広い共感を意味する標語として使われるようになったけれども、この劇の中では、たんにクレメスの世話好きで何にでも首を突っ込みたがる性格の表現にすぎない」とする。城江訳は「私は人間だ。人間のすることは何ひとつ私にとって他人事とは思わない」（同書26頁）とする。

訳注3、原型 archetype と原本 original text とは異なる。原本 original text は自筆原稿と言い換えてもよいが、原型 archetype は現存諸本の出発点にあった本文である。小西甚一「本文批判と国文学」（『文学』第36巻第2号、1968年2月）から、池田亀鑑のドイツ文献学理解について触れた部分を、以下に引いておく。「池田説は、カルル・ラマハンによってなされた「原文」（Original）と「原型」（Archetypus）の区別に従い、原文すなわち作者の自筆本文を再建することはだいたい不可能であり、それを本文批判の目標とするのは、かえって本文批判をいっさい無力または無用とするような誤解をまねくことになるから、本文批判の目標は、現存諸本を系譜のなかで適切に位置づけ、その最初の分岐点すなわち原型を明らかにすることでなくてはならない——とするのである。」なお、この部分は池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』第2部（岩波書店、1941年2月11日）14頁～16頁に該当する。

## 訳者附記

訳出したウォルター・ウィルソン・グレッグ Walter Wilson Greg（1875年7月9日～1959年3月4日）の Bibliography — An Apologia は *The Library* 第4期第13巻第2号（1932年9月）の113頁～143頁に発表の後（その要旨は、1932年3月21日開催の書誌学協会 Bibliographical Society における会長挨拶として発表されている）、Joseph Rosenblum 編 *Sir Walter Wilson Greg: A Collection of His Writings*（Scarecrow Press、1998年）などに収録されている。翻訳に際しては *Sir Walter Wilson Greg: A Collection of His Writings* 所収本文（135頁～157頁）に拠った。初出 *The Library* 誌はペンシルバニア大学図書館などからダウンロードできるが、Greg 論文の134頁～135頁を欠いている。

なお、訳文中には、適宜、訳語に続けて原語をそのまま記載したところがある。また、〔 〕内は訳者による記述である。

なお、本文変容（transmission）と本文推移（textual-transmission もしくは textual transmission）という似通った訳語を用いたが、本文変容（transmission）は、具体的・物理的なものとしての資料体（documents）において目に見える形態上の変化・伝達を言い、一方、本文推移（textual-transmission もしくは textual transmission）は、資料体（documents）に記述された文字から立ち上がってきた抽象的な本文（text）における変化・伝達を指していると解せられる。本文変容と本文推移といった用語で、両者を区別することは馴染みにくいかも知れないが、本訳稿で試みに使ってみた。

本号に掲載したのは前半部分（135頁～147頁）の翻訳で、後半部分（147頁～157頁）については次号に掲載したい。